

2025 年度

A S r 小 論 文

注 意

1. 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。鉛筆またはシャープペンシル・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
3. この問題冊子は4頁までとなっています。試験開始後、ただちに頁数を確認してください。
4. 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認してください。
5. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
7. この問題冊子とメモ用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、下記の間1・2に答えなさい。解答は解答用紙の所定欄に記しなさい。

「理系か文系かを、そもそも分けること自体がおかしい」。こう語るのは生物学者で起業家でもある高橋祥子氏だ。政府の教育未来創造会議やこども未来戦略会議の有識者メンバーを務め、ことあるごとに「文理分け」はイノベーションを求める今の社会になじまない」と「不要論」を唱えてきた。

11年前、東京大学大学院時代に遺伝子解析サービス会社を立ち上げた。以降、初対面の人と名刺交換する際に「謝罪」されることがままあるという。「わたしは文系人間なので(高橋さんの)話がわからないかもしれません……」といった具合だ。

ロボットにしる人工知能(AI)にしる、ゲノムにしる、先端技術が私たちの生活に深く入り込むようになったのは21世紀に入ってからといえる。「学生時代の専攻が『文系』というだけで、その後、先端技術を学ぶ意欲をそがれた大人がたくさんいる。経営にも政治にも行政にも科学や技術は必須な時代なのに、文と理を分ける日本の教育環境がテクノロジー社会に大きな影を落としている」と高橋氏は力説する。至極もつともな主張である。

日本社会には長い間、時間をかけてすり込まれたバイアスのようなものがある。大学に入るのにあたり「数学や国語の好き嫌い、得手不得手」を尺度に選んだ「理系か文系か」。それが「理系は論理的で文系は情緒的」といった、その人の人間性をも支配する非科学的な慣習に化け、人生に染みついていくのもしかりだろう。

「理系」や「文系」に該当する英語の表記は存在しない。もちろん、科学の世界には自然科学や人文科学、社会科学といった分類はある。しかし「理系か文系か」のように学問を大ざっぱに2つに切り分ける思考法は、明治維新以降、近代国家へまい進する過程で日本独自に培われてきたといえる。

(中略)

そして第2次大戦後、文と理の「すみ分け」は深まっていく。高校や大学へ進学する子どもの数が急増、欧米社会に追いつき、追い越せと高度経済成長下で「型にはめた」人材の育成に励んだ影響が大きい。偏差値への崇拜といったいびつな受験競争も手伝い、入試に不要な勉強は効率よく捨てるのに文理分けは好都合で、やがて「低年齢化」していく。

科学史家で5年前「文系と理系はなぜ分かれたのか」を著した隠岐さや香・東京大教授は、中学受験の塾において文系向きか理系向きかを指導するケースを知らされ、驚いたという。「子どものころから理系か文系かというアイデンティティーに縛られるのはよくない」

1959年、英物理学者で著述家のC・P・スノーが「二つの文化と科学革命」と題して講演した。学問を営む上での文理の分断に警鐘をならし、学术界で論争を巻き起こした。

あれから65年、次代を担う高度人材を育む場で、なかなか崩れない、そして崩そうとしない「文理の壁」がそびえる。日本の科学力の進展を阻み、イノベーションの芽をつぶしているように思う。学問を究める博士をどこかないがしろにし、活躍の場を奪う「科学を軽んじる社会」とも通底しているようにみえる。

科学が立ち向かう領域は今や「自然」か「人間」かと、単純に二分できる時代ではない。「人新世」という言葉が注目されるように、温暖化問題は20世紀以降の人口爆発と経済成長という人間の営みが地球に多大な負荷をかけた結果生じたものだ。新型コロナウイルスの感染拡大も、病原体そのものよりも人の行動が大きな影響を及ぼした。

課題解決、リスク回避には「自然をみる理系、人間や社会をみる文系」の知の力をうまく混ぜ合わせる必要がある。男か女か、日本人か外国人か。ダイバーシティー（多様性）という名の下、世間は、人と人とを隔てる無意味な垣根をできるだけ取り払う方向へ動いている。ならば時代遅れの「文と理」という曖昧模糊とした区分も早期に解消すべきだろう。

変革の兆しはある。例えば、国立大学で率先して入試改革に取り組んできた筑波大学。「文系か理系かということではない、その人の学問を希求する力や思いをきちんと判定できるようにしないといけない」と、永田恭介学長は改革の意義を語る。

明日の社会を支える高度な人材を育むには、学問を教える仕組みを環境や時代の変化にあわせて柔軟に変えていかねばなるまい。文理融合や文理横断はもちろん結構だが、その前に必要なのは「文理分け」を廃する教育改革である。

（矢野寿彦『「理系か文系か」やめませんか』

日本経済新聞2024年2月20日による。一部改変）

問1. この文章の筆者が「文理分け」を無くす必要があると考えるのはなぜか。200字程度で説明せよ。

問2. 「文理分け」に対してあなたはどのように考えるか、700字程度で述べよ。